

室井尚×吉岡洋 連続講座

哲学とアートのための

# 12の対話 — 「現代」を問う

テーマ **11** 専門家やプロは信用

できない — 科学の限界



---

## 第11回 専門家やプロは信用できない—科学の限界

---

吉岡 洋 (進行 安藤泰彦)

安藤 お集まりいただきましてありがとうございます。時間になりましたので始めさせていただきます。11回目になりました。考えてみたら不思議な講座です。片方がおられないのに「室井尚×吉岡洋連続講座」。これは室井さんが生きておられた時につけていたんですけれども、漫画の中では常に室井さんが出てこられるし、考えてみたらすごい不思議な連続講座だったなと、まだ続くんですけれども…。11回目「専門家やプロは信用できない—科学の限界」ということで、いつものようにまだ室井さんがご存命の時、3月12日に行ったプレ講座の記録映像から一部抜粋して流します。



<https://youtu.be/60l9SB4Ja7I?feature=shared&t=3011>

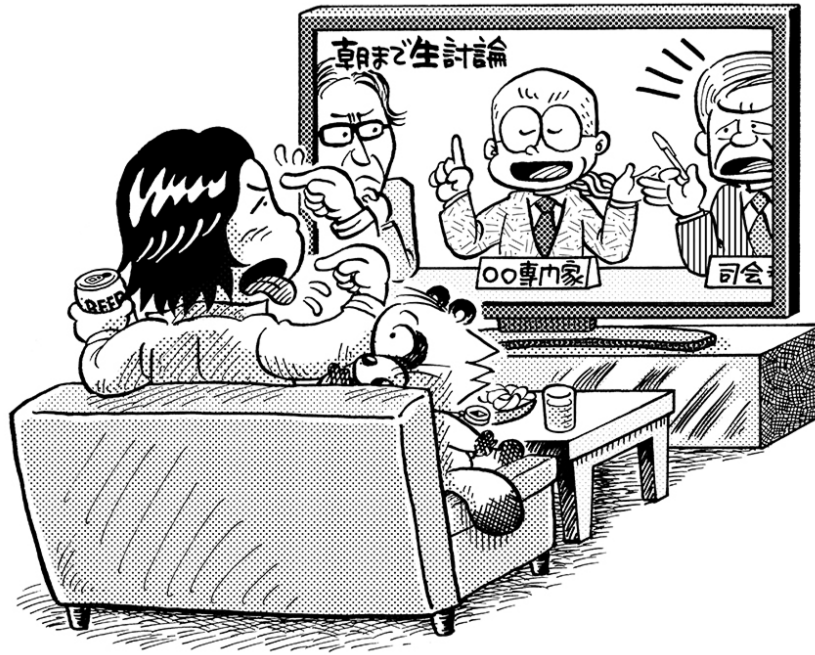
プレ講座 (2023.3.12) 記録映像

第11回 専門家やプロは信用できない—科学の限界

吉岡 この動画、ほとんど僕しかしゃべってない。全然対話じゃないよね (笑)。これは僕のせいというより、しょうがなかったんです。このプレ対話は1時間ぐらいやったんですが、第1回目からお互い代わりばんこに出したテーマについてその趣旨を言うということで、最初のうちは室井さんも結構しゃべってたんですよ。でも40分ぐらいすると疲れてきて、もう「あと頼むわ」みたいな感じになったので、最後の方の回については僕がほとんど喋ることになってしまいました。喋りすぎて今日の骨子をもう言ってしまう感じがすけれども……。一つ間違っていました。「ディレクタント協会、ソサエティ・オブ・ディレクタンティ」がイギリスで作られたのは17世紀ではなく18世紀で、1730年代です。

今日は11回目で、「専門家やプロは信用できない」。映像では僕がたくさん喋っていたというだけじゃなく、話に結構熱がこもっていましたね。あれは、この映像を撮ったのが1年前で、今よりも感染症の問題がまだ結構うるさかった時だからです。したり顔の専門家みたいな人たちがメディアに出ていい加減なことを言っていたからです。ちょっと腹に据えかねてるみたいなのが。室井さんは僕よりもずっとテレビをよく観てました。今回のチラシの漫画にあるように、眉に唾つけながら。僕はある時期から見ないようにしてしまったんだけど、室井さんはニュースからバラエティー系からドラマから、疑いつつ観てたのだと思います。

このチラシの漫画も、11回目の今回まで色々な役を室井さんと僕とタヌキが演じてきたんですけれども、何か、回を追うごとに僕は悪役が多くなったような気がする (笑)。こないだはコロナウイルスだったし、今回はまさに怪しげな「専門家」という役ですね。テレビの討論番組みたいなところで何かペラペラと喋ってるって図です。横にいるのは田原総一朗に見える。それを、室井さんが観ながら眉に唾つけてるっていう場面なんだよね。



イラスト／谷本 研

漫画を描いてくれた谷本研さんが、今回も非常に話を作り込んでくれて、横にタヌキがいて、「眉唾モノ」っていうことを表してるようなのです。キツネとかタヌキが人間を化かす時には、眉毛の数を数えるという考え方があって、数えられると化かされてしまう。だから数えられないように唾でならして何本か分からないようにすることから、疑わしいものを「眉唾モノ」というようになってたらしいです。このマンガのタヌキはどう考えても化かすような能力はないような気もしますが。

さて今日のテーマは専門家とプロということなんですけど、まず専門家ということから考えてみたいと思います。今回の資料の前半の文章は書き下ろしです。これを見ていただきながら話をしてほしいと思うんですが、もちろん専門家は必要ないとか悪だとか言いたいわけではない。専門家というものはある意味、文明と共に存在していたはずなんです。大昔だって、何らかの特殊な技能に熟達した人、知識を持っていた人は集団の中にいたはず。だから、そういう存在を広い意味で専門家と呼ぶのであれば、もちろんいつの時代も専門家はいたし、必要であったわけです。が、この今回の講座で問題にしたいのは、いわばカッコ付きの「専門家」なんです。つまり、特定の領域に関して優れた能力や知識を持つ人という一般的な意味ではなくて、より制度化された意味というか、近代的な意味での専門家です。

近代における専門家というのは典型的には、大学その他の、公的に認証を持っている教育機関、養成機関で訓練をして、学位とか、何らかのライセンスを持っている人ですね。そういう専門家のことです。必ずしもテレビに出てきている「専門家」は、そういう人たちばかりではありませんけどね。

メディアはわりと「専門家」をすぐ作っちゃうんですよ。僕はテレビには出ませんが、時々出演する人に聞いてみると、「先生、肩書はこれでいいですか？」って聞かれるんだって。〇〇大学教授というのは、客観的な肩書きで嘘じゃないんだけど、それだけではインパクトが弱いから、「若者の自殺に詳しい心理学者の何々先生」とかね。この場合は資格もライセンスも要

らない。番組の制作者が勝手に作っちゃう。でも肩書きが画面に表示されると、観ている人たちは「テレビに出てるような人だから、きっとそうなんだろう」みたいに信じてしまう。いかにいい加減かということです。

本当の専門家同士、たとえば学会とか、ある分野に通じた人たちの集団の中では、そういうのを見てびっくりするんだって。「え？ この人そんな業績あったっけ？」みたいな。紹介されている分野の論文なんて一本も書いてなかったり。そういうことは陰では噂するかもしれないけど、わざわざテレビ局に電話かけて「あの人は専門家じゃないですよ」なんて言わないじゃないですか。すると通っちゃうんですよ。それがメディアの恐ろしいところです。資格がなくても権威づけはできるということですね。もちろんメディアは私たちが騙そうとしているわけではなくて、その方が番組にインパクトが出るし視聴率が上がるからやっているだけなのですが。

しかし感染症のような多くの人にとって重大な問題の場合、メディアに登場する「専門家」の与える影響は大きいので、その権威付けが番組制作の決定権を持っている人たちの手に握られてしまうことには、大きな危険があると思います。

さて「権威」ということなんですけども、どうですかね。皆さん、「権威」って好きですか？(笑) こういう聞き方もおかしいけど、権威というのは社会学や哲学にとっての一つのテーマでもあるんです。大学の学部講義なんかで「権威」について話をすると、「権威に惑わされてはダメです」みたいな反応が返ってくる(笑)。権威は悪いものだというような気持ちを持つ学生は多いですね。権威そのものに反発を感じるのは若者の常かもしれませんが、権威というのは別にそれ自体が悪いものではないです。むしろ社会にとって必要なものなんです。権威って何かというと、偉そうにしていることじゃなくて、その人の行うことや言うことが正しいということ、証明なしに通用させる力のことです。

つまり権威というのは力、パワーなんです。現代の私たちは非常に複雑化した世界に生きています。原始時代の狩猟採取生活のような文化の中に生きていたら、それぞれの人が生きていくためのさまざまな技術や技能、テクニック、動植物についての知識とかを、自分で習得していた。どうやって狩りをするか、どうやって身を守るか、みたいなことをみんな自分で知っていたので、権威に頼る必要はありません。したがって専門家はそれほど重要ではない。目に見えない自然の力をコントロールする呪術のような領域にはある種の専門家がいたかもしれませんが。

それに対して現代のように複雑化した社会に生きていくためには、自分自身ですべての分野に渡って、自分で触って確認したり、知識を獲得したりすることは物理的にできないわけですね。ほとんどの事柄について、証明なしに信頼して判断するしかない。だから、権威というものが機能しないと生きていくことができない。そういう時代に僕らは生きています。

権威は必要なものであるということなんですけど、しかし権威とは先ほど言ったようにパワーですから、パワーというのはそれ自体を別の目的で使うこともできるということなんです。これが、たとえばテレビにナントカ学の専門家吉岡先生が出てきて喋るとね、多くの人が「あ、そうなのか」と思ってしまうという、これがパワーですね。しかもそうした部分について比較的私たちは無自覚というか、権威が自分たちを惑わすというネガティブの面もあるということ、あまり意識することがない。学校でも教わらないし、テレビはもちろん言うてはくれません。「この番組で吉岡先生を専門家として出してますけれども、全部信じちゃダメですよ」ってテレビは言うてくれませんからね。だから結果として一方向だけに多くの人が引っ張られてしまうことがあります。

さて、こういう近代的な意味での専門家、つまり何らかの認証を受けて影響力を及ぼす人としての「専門家」は、歴史的にいつ誕生したのだろうかということです。それは19世紀のヨーロッパ



パで生まれたと考えていい。厳密に何年の何月何日っていうことはできないんですけども、一つの指標として科学者の誕生ということが言えます。科学者は専門家の典型ですよ。さて科学者という考え方、サイエンティストという存在は19世紀のイギリスで生まれました。そう言ったら「いや、そんなことないじゃないですか」って言う人が絶対いると思う。だって科学者の代表の一人とも言えるニュートンは17世紀の人じゃないですか。レオナルド・ダ・ビンチだってある意味では科学者であったし、古代ギリシャのアルキメデスだって科学者じゃないですか、と。しかし、今から振り返ると彼らは科学者のように見えるのですが、厳密に考えると彼らは科学者ではありません。

なぜかという、これははっきりとした客観的な事実なんです、「科学者」という言葉が存在しなかったからです。「科学者」という日本語は英語の「サイエンティスト (Scientist)」の訳語ですが、サイエンティストという言葉が初めて登場するのは1833年なのですね。それははっきり分かっているんです。意図的に作られた造語だから。もちろんそれ以前も、「サイエンス (Science)」という言葉はありました。「サイエンス」は非常に古い言葉であって、ラテン語の「スキエンティア (scientia)」っていう言葉が英語化したものです。そのサイエンスをする人という意味で「ist」って付けて「サイエンティスト」って言葉を作った。

それを作った人も分かっているんです。それはウィリアム・ヒューウェル (William Whewell) というイギリス人です。資料の2ページ目のところに写真が載っています。この人は何者かという、まずアングリカン・チャーチ (Anglican Church)、英国国教会の牧師さんなんです。ということは、宗教家なんですよ。神学の研究もしてて論文もあるんです。と同時に哲学者でもあり、科学者でもあると同時に、科学史家、科学論つまり科学の評論家みたいなこともやっていたんですね。

すごい、何者?って思うでしょ。何でそんなにいろんなことができるのかと思うかもしれないけれど、それは私たちが今専門化した社会に住んでいるから、そう見えるだけなんです。19世紀の初めぐらいまでは、こういうのは知識人にとってわりと普通のあり方です。狭い特定の分野のことしか知らないなんていう人は、いることはいましたけど、あまり重要視されません。知識人は全体的知識を持っているのが普通なんです。ニュートンだって、別に物理学の研究だけしていたわけじゃないですからね。

ニュートンは運動方程式を発見するために費やした努力の何倍も、聖書解釈学に使ってますからね。旧約聖書の記述を詳細に調べて、その中に出てくる登場人物の生没年、何年に生まれていくつで死んだかということをつなぎ合わせていけば、アダムが誕生したのがどれぐらい前か、つまり神の世界創造がいつ起こったかというのが分かるじゃないですか。実際には完全につながっていないので難しいんですけど、紀元前4,000年くらいではないかと推定ができるわけです。だからこの世界は今から6,000年くらい前に創造されたことになります。わりと最近ではないか、と現代人は思うでしょうね。

とにかく、ニュートンのように天地創造を文献学的に証明しようと努力した人が、同時に物理学の研究もしたわけです。現代の私たちから見ると、物理学者、科学者っていうのはそんな神様とか、神様による世界創造とかは前提しないで、宇宙の成り立ちを合理的に説明しようとするものだと思うかもしれませんが。でもそんなことはないのですよ。17世紀の「科学者」———というか、厳密には自然の探究者、「自然哲学者」と呼ぶべきなのですが———は基本、全員の有神論者です。神の存在は宇宙の物理的理解と矛盾しませんから。かくもシンプルで美しい秩序を持った世界は、それ生み出した超越的存在がなければありえない、というのは当然のこと何です。だから物理学者が同時に、宇宙論、形而上学、神学に対する見解も持っているんですよ。持たざるを得ないわけです。

19世紀のこのヒューウェルという人もそうなんです。ただ、この人はターニングポイント、今の意味の「専門家」が生まれる時代の転換点にいる人なんで、自分はいろんなことができるんだけど、同時にですね、専門的文化の世界つまり今のような世界が成立するための言葉を作り出しているんですね。それもちょっと紹介したいなと思って、ちょっとややこしいですけど、英語で書いてあるから。このウィキペディア英語版の、僕がこの資料の中で線引って張って太字にしたもの。これは僕がしたんですけども、こういう言葉を考え出したのがこの人なんです。考えを作り出したんです。面白いですけどね。

ちょっと普通何か知らないような言葉もあるかもしれません。「サイエンティスト (scientist)」でしょう、まず科学者。「フィジスト (physicist、物理学者)」とか「リンギスティックス (linguistics、言語学)」とか。この人が考えたんですよ。それまでも言語の研究はあったけど、「言語学」というタームはなかったんですよ。名前ができるってリンギスティックスという専門領域ができるんですね。「コンシリエンス (consilience)」というのもこの人が作った言葉です。この語の日本語訳は知らないんだけど、決まった訳語はないんじゃないかな。「コンシリエンス」ってのは要するに、複数の異なった研究方法が同一のことについて説明する時、こっちの方法で説明し予測できることと、別な方法で説明し予測できることが一致すると信憑性が高まる、その一致のことを言う概念です。例えば細胞の働きについて生物から説明するのと、それから生化学や物理学から説明することが合致すれば、正しいということが分かる。そういう合致のことを「コンシリエンス」と言う。

「カタストロフィズム (catastrophism)」 「ユニフォーマタリアリズム (uniformitarianism)」というのもこの人の造語です。ちょっとややこしい言葉ですが面白いのでちょっと解説するとですね、18世紀ぐらいになるとこの地球がどうして今のような姿をしているのかということに関心が出てくるのです。旧約聖書にはああいう風を書いてあるけれども、実際にはどんな変遷を経て地形や生物がきたのかということです。ダーウィンの進化論が出てくるはるか以前から、地下を掘ったりすると色々なものが出てくるわけですよ。何で掘るかということ、産業革命が進行しているから石炭とか金属を求めて掘ると、目的のもの以外にもいろんなものが見つかる。現在の我々が知っている動物ではない骨格が見つかったりする。すると、太古には違う生き物がいたんじゃないかという推測が当然出てくるわけね。じゃあ何で変わったんだということです。変わる要因を説明する二つの対立する説があって、その一つが天変地異説、カタストロフィズムです。

カタストロフィー (catastrophe)」って聞いたことがあるでしょう？ 「カタストロフ」とか「カタストロフィー」っていうのは、世界の終末みたいな大変化が起こって、いろんなものが滅びてしまうようなことを「カタストロフ」って言います。核戦争とか、大地震とかね。日本語ではそれほど使わないかな。フランス人とか、よく使うよね。テーブルがひっくり返ったり子供がおしっこ漏らしても「カタストロフ！」(笑)とか言うよね。

それは大袈裟なんだけれども、カタストロフ、カタストロフィーという言葉は以前からありました。そこから「カタストロフィズム」いうのをヒューウェルが作ったんです。つまり、この世界とは大昔に大きな変化が起こって、それまでの生物が滅びて、その後また新しい生き物が出てきたんだ、というような考え方。そういう考え方を「カタストロフィズム」で言ったんですね。

その反対が「ユニフォーマタリアリズム」で、これは「斉一説」と訳されるのかな。これは要するに、連続的に変化してきたんだということです。「カタストロフィズム」っていうのはノアの洪水みたいなことが起こったんだという考え方ですね。それに対して、進化論はどっちかということ「ユニフォーマタリアリズム」、連続的に変化してきたんだという考え方なんです。こうした考え方の対立を、言葉を作るとはつきり分かるじゃないですか。「あの人はカタストロフィズムを

信じているが、本当はユニフォーマタリズムが正しい」と、そういう風に分類することによって、複雑化してきた知的世界が整理できる。ヒューウェルというのはそういうことをやった人なんですよ。

こういう造語をどうやって作るかという、大体はギリシャ語をいじるんです。「カタストロフ」もギリシャ語ですね。それから「アスティグマティズム (astigmatism)」というのもヒューウェルが作った言葉ですが、これは何かというとこれは乱視のことです。どうやって作るかという、「スティグマ (stigma)」っていうのは目立つ点のことなんです。たとえばインクが飛んで服に染みができたようなのがスティグマです。奴隷が焼印を押されたりするのも痛々しいスティグマの例ですね。元々は点のことなんです。「ア」は否定の接頭辞だから、点が否定されて、つまり焦点が合わないということですね。だから乱視がアスティグマティズム。こういう言葉を作り出すことで、眼科学がこの現象を記述しやすくなる。

さらに意外なことでは、マイケル・ファラデー (Michael Faraday) って聞いたことないですか？最近では読まれないのかな…昔はちょっと科学好きの少年に、先生はファラデーの『ロウソクの科学』を読みなさいって言ってました。ロウソクの燃焼という現象から、物理学の基本的な考え方を説明する歴史的な名著とされています。そのファラデーに「こういう言葉を使ったらどう？」って、ヒューウェルが勧めたのが「エレクトロード (electrode)」。「電極」のことですね。それから、「イオン (ion)」という言葉を作ったのもヒューウェルなんです。イオンというのは、原子が電子を失うか過剰に持つかして、電荷を帯びている状態がイオンですね。この言葉をどうやって作ったかという、ギリシャ語の「エイナイ (εἶναι)」っていう、英語で言えばBe動詞みたいな言葉の、中性形の分詞を名詞化して英語にしたんですよ。「イオン」って言ったら、私たちはもう慣れているけれど、恐らくヒューウェルが作った当時の19世紀の人は「なんじゃそりゃ」っていう感じ(笑)だったと思います。しかしこの言葉があったために電磁気学は記述がしやすくなった。科学っていうのは、実験したり機械を作ったりするような現場での作業だけではなくて、同時にそれによって得た知識をどうやって言語的に整理していくかということもすごい大事で、後者の方にすごく貢献した人がこのヒューウェルだったんですね。

こういう風に「サイエンティスト」というのは19世紀に作られた造語なんですけれども、それに対して「サイエンス」っていうのは、先ほども言ったように非常に古い言葉で、知識一般を意味する言葉です。私たちは日本語が母語なので、日本語で考える時にはサイエンスは「科学」という訳語で考えますが、日本語の「科学」という訳語の中にはその元の「サイエンス」という英語が持っている古い意味が希薄化しています。普通の現代日本語で「科学」と言ったら、それは大体自然科学のことしか意味しないですね。知識一般という意味は薄れてきています。でも元の英語の「サイエンス」には、まだラテン語の「スキエンティア」の持っていた知識一般という意味が残っています。英語だけじゃなくて、西洋言語一般には残っています。

知識一般とは何を意味するかという、この19世紀のヒューウェルぐらいまでの時代には、科学者が特定の領域について専門的に研究していたとしても、知識というものはそもそも、他の領域やそれを包括するより大きな世界観、狭義の自然科学ではない知識の領域、たとえば神学、芸術、文学とか、そういう知識と連動してるという自覚があったんですね。それが「サイエンス」という言葉の広い意味を支えていた訳です。実際ヒューウェル自身も数学や機械工学や物理、天文の研究をしながら、同時に、この人はドイツ語もできて、ゲーテの詩を英語に翻訳したり、それから神学の論文を書いたり、そういうこともしていたんですね。

これは何を意味するかという、彼はただ色んなことができた才人だったということではなくて、

そうした異なった知の諸分野の間には関係があったんですよ。こういう人のことを「ポリマス (polymath)」って言うんです、英語で。無理に訳すと「博識家」としか訳せないけどね。「ポリ」は複数、たくさんあるということ、ポリエチレンとかね(笑)。「マス」というのは数学だけじゃなくて「マテシス」というのは学びとか学科のことです。「ポリマス」なんて名付けること自体が、近代の兆候だよ。そもそも「ポリ」じゃないんですよ。全部結びついている状態が本来の「スキエンティア」なんですよ。そういう古典的な理想がなくなってきたということです。

ただ、現在でも僕が知っている色々な領域の研究者の中で、僕がこの人は本当に優れた人だなと尊敬できるような人たちは、知の全体性という認識を持っています。「専門が違うから私には分かりません」とか、そういうことは簡単に言いません。そして、自分と全く違うことをやっている人にも関心を持つんです。本当に優れた人は、そうじゃない人は専門家意識が強くて、自分には関係ないと言います。そういう価値観を僕は持っているのですが、このポリマスの知性、全体知に対する許容度っていうのは、普通の学術研究の制度の中では重要視されないというか、評価できないように作られてるんです。

要するに、学術とか研究とかの世界では、広い視野を持つ知識人を評価する指標がない。大学の人事とかでも考慮の対象にならないですよ。「この先生はあんまり論文も書かないけれども、色々な分野に対して広い知見を持っているから教授にしましょう」とか、そんなのは通用しないんです。昔は少しは通用したんです。業績なんかなくても偉い人は偉かったんです(笑)。

例えば誰がいるかな、フェルディナン・ド・ソシュールっていう記号学の祖と言われるスイス人の言語学者がいるでしょう。あの人もほとんど論文書いてないんですよ。『一般言語学講義』っていう本が主著と言われてるんですけど、あれは講義録ですからね。学生が講義を筆記したものを後から出版したんです。美学でも明治時代に大塚保治(おおつかやすじ)っていう東京帝国大学の初代の美学教授がいるんですけどね。あの、夏目漱石の『吾輩は猫である』に出てくる迷亭(めいてい)という、一番いい加減な登場人物のモデルと思われているんですけど、この人もほとんど論文も本も書いてないです。亡くなった後に学生たちが大塚先生の本を出版してあげています。今はあり得ないですね。

広い視野を持ち、見識があることは客観的な指標にはならない、なりにくいんです。全体知は数値化できないから評価されない。一方、専門家は論文の本数とか引用数とか数値化可能だから、評価しやすいわけですね。

こうした価値観が教育制度の中にも反映されています。ある程度の年代以上の方は御存じのように、昔の大学には教養課程というのがあって、どんな学部の学生も人文、社会、自然科学から同じだけの科目を選択しなければいけなかった。今でもちよつとは残ってるんですけど、昔のようにまず全体的教養を身につけてから専門教育に行くという考え方は、それほど強くありません。今はなるべく教養なんてすっ飛ばして、早く専門家を養成しましょうみたいな、そういう風になってきた。だから専門的知識は重視されるけれども、全体的知識というのはリスペクトされないですね。そういう風になってきました。

その一番わかりやすい例が、お医者さんの世界じゃないかなと思います。それで、資料にはちよつと個人的な経験を思い出して書いたんです。どういうことかという、僕が子供の頃の昔のお医者さん、特に町医者の人なんかは総合医で、何でも見るわけです。だから、身体の調子が悪くなったらとにかくかかりつけのお医者さんに診てもらうんだけど、今から思うとかなりいい加減な診断でした。聴診器とか触診をして、本当はよくわからなくても「大丈夫、大丈夫」とか言い



ました(笑)。今のお医者さんは、滅多に大丈夫と言わないでしょう。逆ですよ。様々な医療機器で検査して、モニターの数値を見て、考えられるリスクを全部列挙するんですよ。すると患者さんは不安のどん底にたたき落とされるわけです(笑)。

昔のお医者さんはそれに比べたらいい加減かもしれませんが、全体知というのはそもそも「いい加減」ということでもあるんです(笑)。けどこれは、医学という分野に限って言えば合理的な側面もあるんです。なぜかという、「大丈夫」と言われたら、患者は安心してストレスが減るんですね。すると自然免疫の機能は高まります。昔のお医者さんがそういうふうに考えていたかどうかは知りませんが、結果的には必要以上に患者を心配させるのはよくない。そういうことが何となく直感的にわかってたのではないかな。

今のお医者さんはその逆です。専門家で、全体が見えない。リスクを列挙するのは責任を回避するためです。もちろんそうではない医師もいますが、少ない。数年前、母親を看取った時に、いくつかの病院にかかっていたんですね。で、あるとき有名な総合病院の内科の先生から腫瘍が見つかったと言われ、悪性に発展する可能性が高いと診断された。その時母は80歳ぐらいだったんです。「どうしたらいいんですか?」って聞いたら「開腹手術して摘出しましょう」と言う。母はその前にもちょっと他のことで手術したばかりで、大変だったんです。それで、「その腫瘍が拡大して生命に影響が及ぶのは今からいつ頃ですか?」って聞いたら、「そうですね、早くて90代の後半くらいでしょうか?」って平気で言うんですよ。僕は、「お前正気か!?!」とここまで出かかった(笑)。

その医師は専門家としては優秀な人で、検査結果の画像や数値から、内科医としての判断をしたのでしょう。しかし、体力の弱った80歳の老人に開腹手術するダメージと、100歳くらいでもしかしたら命を脅かすかもしれない腫瘍を摘出する利益とのバランスを、全体として考えることができないんです。それでその後、足の方も悪かったので、比較的信頼できると感じていた整形外科の先生に「今こんなことを内科の先生に言われたんですけど」と判断を求めたら、「そうですね。専門医の判断に口を挟むのは勤務医として憚られるが、もし自分の母親だったら、絶対に手術なんかさせません」(笑)って言ってくれた。それで母も安心したんですね。何か、今の時代というのは専門家的な判断に傾きすぎておかしいことになってるな、と感じました。

ちょっと時間がなくなってきたけど、愛の話もしなきゃいけない。「プロとアマ」という話です。ビデオ映像の中でも結構しゃべってましたから、概略はおわかりかもしれませんが、こういうことなんです。配布資料にあげたこの部分の引用は書きおろしではなくて、10年ぐらい前に京都の「ボイス・ギャラリー」という、松尾恵さんが主催されている現代美術画廊から『有毒女子通信』という小冊子を出していたんですけども、そこに書いた「ところで愛はあるのか?」というエッセイなんです。

これはちょっと面白いので紹介します。年下のアーティストの友人から聞いた話で、彼は学生時代に何となく好きだなと思ってた女の子とある時二人きりになって、キスしたんだって。そしたら、その女の子が真顔で自分の方をまっすぐに見て、「ところで、愛はあるのか?」って言ったという(笑)。誰のことだ?って思うかもしれませんが、このアーティストとはT・Tで、誤解を避けるために付け加えると、相手の女の子というのは今の彼の奥さんです。まあ、結果としてはいい話でしょう?(笑)「ところで、愛はあるのか?」というセリフがとても気に入ったのでタイトルにしました。さてこの話を聞いて、自分自身のことも思い出したのです。

中学3年の時のクラスに、すごく美人でクラスのマドンナみたいな女子がいたんですよ。勉強もスポーツもできて、性格も良く、背が高く早熟なんです。お父さんは共産党員でお医者さんだっ

たかな？そしてキリスト教徒なんです。クラスの班ごとに日誌みたいなのを回覧するようなことがあって、僕はたまたま同じ班だったんです。そこに彼女が「自分は民主青年同盟で、クリスチャンである」みたいなことを書いたんですよ。僕は中学の頃、勉強もスポーツもできない暗い少年だったんだけど、変に生意気だったので、彼女の記事を読んで「マルクス主義者は無神論じゃないとおかしいのではないか」（笑）と書いた。

そしたらそれがきっかけで、みんなが憧れるそのマドンナと話をするようになったんです。別に付き合ったわけじゃないですけどね。今みたいに中学生がカップルになるなんてまずありえないし。何だか難しいことを話し合っていたんですね。それである時、愛とは何かという話題になった。曾野綾子の『誰のために愛するか』という本が1970年代に話題になって、愛するということは、その人のために死ぬることだ、みたいなことを彼女は書くわけです。僕は曾野綾子なんて知らなかったんですが、そういう定義を突きつけられて何か「えっ？」（笑）となって白けちゃったんですね。「愛」というものを真正面から突きつけられることによって、愛がなくなっちゃったというか。

まあそんなことはどうでもいいのですが、「プロとアマ」の「アマ」の方は、そもそも愛から発しているということが言いたかったのです。「アマ」とは「アマチュア」ですが、元々この「アマチュア (amateur)」っていう言葉の「アマ (ama-)」っていうのは、「アモール (amor)」から発する言葉ですね。「アマトーレ (amatore)」っていう、ラテン語からイタリア語になった言葉が英語化されたものです。愛のことを「アモール」。だからアマチュアとは愛好者っていう意味なんです。愛好者っていうのは別に「専門家」ではないわけですよ。もちろん何かの愛好者は専門的知識を持つようになるかもしれないが、専門的であることが重要なのではなくて、あくまで「愛」が大事なのです。

それに対してプロ、プロフェッショナルとは、専門家でしかもそのことを職業にすることです。現代では、アマとプロっていうのは何か能力の違いみたいに考える人が多いですね。アマはプロよりも、将棋でも何でも下手なんですよ。対戦すると負ける。時々勝つこともあるかもしれないが、「アマチュアにしては強い」とか言われるんですね。そういうふうに能力の違いとして区別しませんが、本来はそういう意味ではないということです。アマチュアっていうのは愛好者という意味で、何をするにも愛から発するということです。ではそれに対立するプロとは何かというと、必ずしも能力が高いわけじゃなく、愛が根本の動機づけではないということです。

プロは愛がないんですね。もちろん一般にプロと言われている人も、自分のやっていることに愛を持っているかもしれませんが。だけど「プロ」という言い方の中には、「愛なんて、そんな生易しいことではないよ」というニュアンスがあるんです。プロは厳しい。プロの厳しさというのは何かというと、要するにその仕事は愛によって支えられているものではなくて、競争によって支えられているからです。だから厳しくならざるを得ないんですね。

だから現代のようにすべてが職業化される時代には、プロフェッショナル、専門家がリスペクトされる。テレビ番組にも「プロフェッショナル」とか掲げるとみんな観るわけです。そして大体は厳しさや競争を強調するじゃないですか。「ああ、もう楽しくてしょうがない」と言いながら何かを発明したりする人はいないじゃないですか。悩んだり、戦ったり、挫折して絶望の中から這い上がったり、そういうことをしないとイケない。

「プロ」という考え方の根底にあるイメージは戦争なんですよ。戦争が究極のプロなんです。だって命かけてるからね。だから「プロ」的な雰囲気は戦争用語と相性がいいのです。僕は90年代から大学に勤めるようになったのですが、ある時から組織改革の会議とかに出ると、やたらに「ナントカ戦略」みたいな言い方で新しいプロジェクトを提案したりすることが増えた。「大

学を良くしていく提案が何で『戦略』なんですか?」って聞いたことあるんですけどね。「戦争するんですか?」と。90年代くらいから企業でも役所でも何か新しいことを発案する時に「戦略」っていう言葉を使うようになったんで、大学もそれを真似したんでしょうね。そうすると何か真剣な感じがするとか。「第一線」というのも、戦争用語でしょ? 他にもいろいろある。なんでそんな比喻を使うんですか? 「プロ」はよほど平和が嫌いなんですわ。

現代芸術の世界でも、そもそもアヴァンギャルド、前衛って戦争用語ですからね(笑)。芸術なのに、いったいどんな敵と戦ってるのか? 前衛芸術が生まれた20世紀前半というのは、文字通り世界戦争の時代だったんです。だからそういう言葉が生まれるのは当然という面もあるんですけど、今この21世紀になって、何が前衛、最前線なのかはよく分からなくなってきた。文芸評論家の藤田直哉さんが書いた『前衛のゾンビたち』という本があるけど、前衛はゾンビ化した、つまり生きた死体になったというのはどういうことか。それは、たんに前衛精神が衰退してきたということではなく、変質したということだと思います。現代も戦争の時代ですが、その戦争は第一次世界大戦、第二次世界大戦と同じような形をしていない。戦争もまた変質し、ある意味ではより全面的なものになり、不可視になった。

とはいえ、昔の戦争、昔の前衛のイメージも消滅したわけではなく反復される。ゾンビ化したとはそういうことなのでしょう。現代もなお、専門主義とプロフェッショナリズムに囚われていて、前進とか進歩とかそういう観念に容赦なく急ぎ立てられて、戦争へと追い込まれてゆく。この流れに抵抗することはなかなか難しいのだけど、私たちはあえて立ち止まって「ところで愛はあるのか?」と問いかけるべきじゃないか、というのがこのエッセーの趣旨でした。

最後に、映像の中で室井さんが「そう言えば吉岡、ディレッタントも好きだよわ」と言っていたでしょう。なので、この「ディレッタント」というものについてちょっとだけ話をして終わりにしたいと思います。なぜ室井さんはあんなこと言ったのかなと思いついてみると、彼が呼んでくれた横浜国立大学の集中講義の中で、ディレッタントの話をしたことがあったからだと思います。イギリスで18世紀の前半に「ソサイエティ・オブ・ディレッタンティ (Society of Dilettanti)」っていう社交クラブができたんですね、ディレッタンティはイタリア語でディレッタントの複数形ですが、ディレッタントという言葉は日本語に外来語としても定着しています。現代ではあまり使わないかな? 辞書を引くと「学問芸術の愛好者」のように説明されていますが、悪口として言われることもあります。研究者仲間で「あの人はただのディレッタントだ」と言うと、プロじゃないということなんですわ。好事家、物好きというようなニュアンスもあります。

でもディレッタントは元々悪い意味ではありません。愛を探究の基本に置くということで、研究者の本来的なあり方だと思います。今モニターに映してもらっているこの絵は、ジョシュア・レイノルズ (Joshua Reynolds) という画家が描いたソサイエティ・オブ・ディレッタンティの肖像画です。こんな感じでしたよという、雰囲気が伝わると思います。メンバーは上流階級、貴族とか上層ブルジョアジーの出身で、お金に余裕があるので、若い時にフランスやイタリアに留学するんです。留学といっても特定の大学に入学するというのではなくて、長い旅行をしながら教養を身につけるんですね。「グランド・ツアー (Grand Tour)」って言います。ツアーといっても、2年とか3年、長い場合は7、8年も外国を遍歴します。勉強だけではなく、宮廷風のマナーを学んだり、女性経験を積んだりということもありました。それで帰ってきて、そこで得た知識や持ち帰った美術品などをとくに、情報交換や研究をするのですわ。これがいわゆる美術史の始まりです。

美術史といっても今のように専門化されたプロフェッショナルな領域ではなくて、非常に視野

の広い教養の世界です。こういう人たちが「アマトーレ」、つまりアマチュアなのですね。愛を基本にした知の探究。知への愛というのは哲学（フィロソフィー）の語源でもあります。この団体は文化事業に寄付もしたりして、歴史的にはイギリスの「ロイヤル・ソサイエティ（王立協会：Royal Society）」となっけていきます。しかし19世紀も後半に入ってくると、こうした余裕のある社交の世界は、ある種時代遅れみたいになってくるんですね。産業化が進行して、「もうそんなどかな時代じゃないよ」みたいになってくる（笑）。日本だと明治以降ですね。富国強兵という国家的目的が設定されて、それにとって役に立つか立たないかが問題にされるようになる。専門家は役に立ち、趣味人は役に立たない、プロは有用で、アマチュアは不要不急という分断が生まれます。そして現在に至るんです。

僕がここで最後に言いたいのは、昔は良かった、のどかだった時代を復活せよということではありません。たしかに、ディレッタントは過去の理想だし、そういう人たちは特権階級で、もし目の当たりにしたら、どうしようもない人たちだなあと、もっとマジメにやれと思うかもしれません。でも、現在のように何もかもがプロフェッショナルライズされ、専門化され、それ以外の知のあり方に価値を置かない社会は行き過ぎだと思います。もう少し元に戻し、教養主義やアマチュアリズムを大事におかないと、プロフェッショナルで専門的な文化の活力も結局は枯渇してゆくと。思います。なぜなら、すべての根底にあるのはやはり愛だからです。

そうした環境をどうやってそれを確保するかという問題を、僕も大学にずっと30年以上も関わってきた中で、深刻に感じてきました。自分の担当するゼミとか授業とか、そういう個人レベルでは何とかできるんですよ。室井さんもそう言った。もう個人レベルで戦うしかない。大学なんか絶対変わらないからね。今もそうだと思うんですけど、今は室井さんとかいう話をしていた90年代とは状況が変わってきた。それは、研究や芸術の世界一般もそうですけども、大学も新自由主義的な「改革」が行き着くところまで来て、本当に崩壊し始めているからです。建物や制度としては存続していますが、生命力が枯渇して始めている。そういう危機感が高まっているので、僕らが若い教員だった時に「どうせ大学なんてつまらんところなんだから、個人で面白いことするしかないよ」みたいな気楽なことでは済まなくなった。しかし深刻になりすぎても仕方がないので、何か面白いことを見つけていくしかないのですが。僕にとってはこの12の対話という講座も、そうした模索のひとつだと考えています。



---

## 参加者との対話

---

安藤 では後半、発言タイムということで始めたいと思います。

発言者A ちょっと最後のところのお話に関連して質問をしてみたいと思うんですが、話がまだ自分の中でまとまってなくて、あっち行ったり、こっちへ行ったりしてしまうかもしれないんですけども。今、特に大学で人文学とかアートを教えたりっていうことに対しては、予算が削減されたり、行政の介入を受けたりする。僕はちょっと今、話題になっている英語を公用化するかアホなこと言っている大学から来ているので、何かほとんど嫌になるんですけども。大学の中で人文学とかが置かれている状況が厳しくなっているっていう一方で、SNSとかYouTubeを通して大学という権威に依らずにというか、まあアマチュアが人文学的な知識とか入門的な講義を発信するっていうことも今の状況としてあると思うんですね。ただ、そのほとんどの場合は、そこにあるのは愛ではなくてビジネスじゃないかという感じがしていて、ちょっと粗製濫造なところがあるかなというふうに見ています。

つまり、専門家とアマチュアの間に溝がどんどん大きくなっているというか、互いに互いを馬鹿にし合っているみたいな状況が今あるのかなと思っていて。ただ一方で、私は私なりに研究者として生きていけないといけないので、たとえその制度としての大学が行き詰まったとしても、今回のお話にあったような愛のあるディレクターをやりたいし、そういう人を増やしていく、増やしていくって言ったらか傲慢ですけど、教育できるような何か場を作らなければならないのかなとお話を聞いていて考えました。

で、ただその時に質問になるんですけども、吉岡先生と室井さんがそういう議論をされていた90年代とは今の状況の方がより危機的であるというお話をされていて、その危機の内実というか、何が一番大きく変わってきているのかなということをお尋ねしたいです。

吉岡 それは重要な問題です。何が大きく変わってきて、今が危機的な状態になっているのか。一言で言うと、昔は冗談で言えていたことが、本気に受け取られるようになった、みたいなことかな。昔だって、大学それ自体なんてロクでもないような場所であつたし、多くの人もそう思っていたことは確かなんですよね。でもそのことは知っていながら、大学で好きなことをやっている先生や学生たちを許していたというか、少なくとも黙認してた。逆に言うと、かつては社会に大学のようなものを黙認するだけの余裕、見識があつたんです。でも今はそれを冗談で済まさない。あんな変な先生が公立の大学にいるのは許せない、みたいになった。

増田聡さんという音楽学者で、美学协会会员でもある人がいます。大阪公立大学の先生なんです。彼が授業で「俺の授業は人に迷惑かけなかったら何をやってもいいんだよ」「何をやってもいい。たとえば鍋やってもいいんだよ」って言ったんだって。面白いけど、講義中に周りの人に迷惑かけないで鍋をやるって、すごく高度なミッションじゃないですか(笑)。ところが、本当にやった学生がいたんですね。それで彼は嬉しくなって、それを自分のSNSに上げたら炎上したと。全然関係ない人が文句言ってきたり、大学にもクレームが来たらしいですよ、こんな先生辞めさせなさい、大学として何やってるんですか、みたいな。

一言でいうと、冗談の通じない世界になったということなんですよ。でも、増田さんは冗談でやってないですよ。本気なんです。こういうことができるのが大学なんだっていう、ちゃんとした基

礎的な思想があるわけ。そうなんだけど、写真だけ切り取られてエックスで拡散したら、「なんや、この先生？」みたいになる。冗談が冗談にならないのは、それはネットの性質だからです。SNSがなかった時代には、それは起こりえなかった。昔でもこんなことをしたら、文句を言う人はいたと思うよ。大学に「こんな変な先生がいる」みたいなことを言う人も昔もいた。違いは、今は大学がそれを笑って済まさなくなったという点です。昔だったら「あっそうですか。言っておきますわ」みたいで終わり。それが、クレームが一つでも来たら何らかの対処をしなきゃいけない、そういう風になってきた。

これは恐らく現象としては、何とかな、ドグマティックな体制がその末期に示す現象であるようにも思えます。ソビエト連邦の崩壊寸前のような。でもイデオロギー的には異なった、いわば「グローバル化」というドグマ的な体制の末期ですね。変則的なものを許さないという点では同じです。大真面目で狂気のようなことを言う人が出てくる。シュルレアリズム演劇のような世界が現実になるのです。英語を公用語化するって、そんなことを今の日本の状況で、何で笑わずに言えるのかっていうのが、根本的に分からない。

でも至るところで同じようなことは起こっていて、僕が勤めていた京都大学でもあったんですよ。そういうこと言い出す人がいたの、教授会で。分厚い資料を持ってきて、講義を全て英語化すれば留学生も受け入れられて国際評価が上がるとか、なんかそういうことを演説するんです。それでその時に、僕はあまりにもバカバカしいと思ったので、「それは素晴らしいですね。でもそんなに英語化したいのに、この提案の文書が全部日本語で書かれているのはなぜでしょう。そしてどうして今私たちは授業の英語化について日本語で議論しなければならないのか、その理由を教えてください」って言ったら、シーンっていやーな沈黙が走って、ところどころクスクスって笑い声が起るんです。

僕はその提案資料が日本語でしか書かれていなかった理由を、本当は知ってるんです。つまりそれは何のために書かれたかという、本気で日本の大学を英語化したいという意図じゃなくて、そういう提案をしてそれが通った暁には認証評価が高まったり、いろいろメリットがあるわけですよ。そういうメリットを目指してるだけなので、英語のことなんて本気で考えてない。もし教育の英語化を本気で考えてるのなら、提案文自体をちゃんと英語で書いてくればいいし、英語で提案すればいい。自分ができないんだったら、できる人に頼んで書いてもらったり、発言してもらえばいいじゃないですか。でもそれはしないんでしょう。だからどう考えてもこれは本気じゃない。冗談としか思えない、僕は。それをまともに指摘されると沈黙するしかないというのは、冗談だからです。どう考えてもおかしいよね。

これに関係することは、以前ブログにも書いたことがあります。『ミニマ・エスティカ』の3巻に収録されていますが、やはり英語化ということについて書いたものです。たとえば、美術館のカタログとかでも日英のバイリンガルにすることが当たり前みたいになっているでしょう？ 基本、作る時はね。それ自体はいいことだと思うんですよ。でもやるんだったら、英語の母語話者の人が読んで、ちゃんと分かって面白いと思ってくれないと意味ないでしょう？ 日本語の原稿をそのまま外注して翻訳してもダメですよ。今だったら自動翻訳でもかなりできるけど、これまではできなかったから、外注すると結構高くつんですよ。なのに出てきた英文は、翻訳者が優秀であればあるほど、わけわからない文章になることが少なくない。日本語に忠実に訳すと、しばしば出てきた英文は訳わからないんです。文脈が違うから。英語で出すのは、それを読んでくれたり参照してくれたりするから初めて意味がある訳じゃないですか。もしもそれを目的として英語化するんだったら、それが本当に英語話者にとって魅力的な文章になってるかどうかが気になるはずなんだよ。たとえ自分は英語できなくても、信頼のおける英語の読み手の人に「これちょっと読んで

みて。面白い？」って聞くはず。でも多くの場合そういう努力をあまりしないんですよ。それは何を意味してるかという、そんなことに関心がないからですよ。私たちはちゃんと国際化に対処していますよ、ということに関心があるだけ。大学の国際ランキングを上げるためとか。そんなことで教育の質が向上するわけがない。

だから90年代と一番変わってきていることは、そういった普通に健全な常識で考えたらバカげていると誰でも分かるようなことを、大学の執行部が大真面目に推し進めようとしていることです。90年代はまだ少しは余裕があつて、ここまで狂気のようなことは起こらなかった。大学だけではなくて、社会のあらゆる場が似たようなことになっている感じがします。

今日は専門主義やプロフェッショナリズムを批判的に見るという話でしたけども、専門主義の反対側には健全な常識があります。専門的知識が過剰に尊重されている状況の裏側には、私たちの常識、良識、「ボン・サンス (bon sens)」っていうものが軽んじられているということがあります。本屋に行ったら山のように、あなたの常識は間違っていますみたいな本があるでしょう。ネット情報でもそうでしょ？「常識の嘘」とか言って煽る。確かに常識で間違っていることもありますよ。だけど、あそこまで常識が叩かれるって状況は、異常だと思います。これでは専門家ではないほとんどの人は生きる自信を失ってします。これが現代の兆候だと思いますが、急に始まったことではなく、かなり前から進んできたことです。小林秀雄も、人々がいかに常識っていうものをちゃんと理解していないかって書いてたじゃないですか。

発言者A プロフェッショナル、嫌い抜きましたからね。

吉岡 その点では、僕はとても共感をしてるところがあるんですよ。

安藤 90年代の改革って書いてあるじゃないですか。それについてとか。

吉岡 90年代の改革、大学に関して言えばやはり国公立大学の独立行政法人化が決定的にでしたね。ただ他の改革もそうなんですけど、革命や戦争と違って、制度改革っていうのは間違ってもすぐには実害が出ないんですよ。革命で王様の首を切ったらすぐに変化が現われるけれども、法制度を改革しても施行された直後しばらくは、まだその前の世界です。だから、改革とか言われてるけど別にそんなに変わらない、国公立大学が行政法人化されたと言うけれども、授業とか大学生活はそんなに変わらないじゃないっていうのが、90年代後半から2000年初頭の感覚だったんですね。

自分の経験から言うと、2010年頃からそれが現れてきたんですよ。毒まんじゅうを食われたみたいに、最初は甘くて美味しいんだが、外側のあんこが溶けて中の毒が出るまでに時間がかかる。それが10年、15年ぐらいかかったっていう感じがあるよね。

自分が教員として働いてきた実感として、例えばこんなことがあったんです。2006年に京都大学文学部に着任したのですが、その時には自分が学生や院生の頃に経験したこの大学の雰囲気、基本的にはそれほど変わっていないなと感じた。ところが2010年ぐらいの教授会で、新しく着任した事務局長が「開講日というものは存在しません」って宣言したんです。開講日というのは何かというと、それまで新年度の何月何日から授業が始まるかということ、各研究室が紙に書いて掲示板に貼りだしていた。たとえば「美学美術史学専修の講義は5月10日からです」とか貼り出すんです。学生はそれを見て「ああそうか、美学の授業はゴールデンウィーク明けまではないんだ」と知るわけ(笑)。

で、それを廃止すると。つまり、学年暦通りに始めなさいというわけ。学年暦では4月の第二週くらいから始まるのだから、もしすぐに講義をしないなら休講にしてくださいって言うんです。「単位の実質化」と言われる、文部科学省からの指導とされてるんだけど、これを守らなかったからといって、文科省から罰則を受けた例を僕は一つも知りません。だから無視しても実害はないのですが、多くの大学では自主規制して、設置基準に書かれている講義日数を確保するという方向に動きました。

なんで今までは可能だったことが急にダメなんですか?と、食ってかかった人がいたんですよ。そしたら、大学設置基準においては「開講日」なるものは元々存在しませんと言われた。それは確かにその通りなんです。つまりそれまでの慣習は、ただ黙認されていただけなんです(笑)。それを法律どおりにしなさいと言ったんですよ。反論できないです。今までは黙認してたじゃないかと言っても、黙認していたのが悪かったんですとなるんですよ。こういうことです。つまり冗談が本気になったというか。

あとは、入試の制度が変わったことですよ。すごく大きな影響を与えたと思う。共通一次試験も、最初の頃は何か冗談みたいな感じだったですね。僕は1990年に神戸の私学に就職して、大学が共通一次試験の会場になるから、教職員は手伝わなきゃならない。試験の場所を提供すると補助金をもらえるからです。今は考えられないことだけど、1990年代初頭の頃は、試験を受けに来ている受験生に向かって監督の先生が「君はどこ受けるんや?」とか言って雑談してるわけです(笑)。学生が東京大学ですかと答えると、「そうか、頑張りや。あかんかったらうちで面倒見たるさかい」みたいな事を平気で言って笑っていたり、そういう雰囲気だった(笑)。

安藤 それ作ってない?

吉岡 いやいや、ホントです。1990年代初頭、僕はまだ若造だったからそういうもんかと思って従ってたけど、何年か経過するうちに、共通試験テストを実施するためのマニュアルの分厚さが倍、倍と増えてきたんですよ。なぜかという、いろんな大学で問題が起こった時、それに対処するために、こういう場合はこうしなさいあしなさいっていう指針が増えるからですね。するとどんどんマニュアルが分厚くなる。それに従ってやりなさいということになって、監督の仕事も増えていきます。

例えば「英語の試験の時、英語の書いている柄の上着は脱がせなさい」とか(笑)。頭おかしいんじゃないかと思った。上着を脱いだって下の服にも英語が書いてあるかもしれないじゃないですか。年を追うごとにそういうのが厳しくなっていった。これはもうブログに書いたこともあるけれども、学生が机の上に出しているものはこれとこれって書いてある。たとえばティッシュペーパーは、鼻水が出る人は必要なので置いてもいいけど、ビニールカバーを取ってティッシュペーパーだけにして積んでおかなければいけない。なぜかという、カバーにいろいろ文字とか書いてあるからだそうです。

それで僕が監督しているある時、一番前列の学生が、「合格祈願のお守り、机に置いていいですか?」と聞いた。僕はあんまり考えずに「別にいいよ、お守りぐらい」って答えたら、監督主任の法学部の教授に「ダメですよ!」って一喝された。僕はまだ若かったんで、その強圧的な言い方にむかついたんですよ(笑)。なぜダメなんですかと聞くと、お守りには漢字が書いてあるからだって。それで僕はその先生に、「国語の漢字の書き取りで北野天満宮って出るんですか。もしその書き取りが出題されてたら、僕大学を辞めます」(笑)って言ったのですが、そしたらその学生が「いいです、そんな大変なことになるんだったら」(笑)と自分で引つ込めた。この学



生が一番大人だった、というような事がありました。

まあこれくらいなら笑い話なんだけれども、その後もどんどん進行してきて、目薬はいいけど目薬の成分に化学物質の名前が書いてあるから(笑)、持ってくる人はガムテープで隠した状態で持って来いとかね(笑)。試験がまるでシュルレアリスム演劇みたいになってきました。面白いでしょ? 教条主義、ドグマティズムっていうものが極端まで行くと、こうなるんですよ。目薬の容器に書いてある薬品名が化学のテストで出題されるなんて誰も信じてないし、「北野天満宮」という書き取りが国語の試験に出るなんてことも信じてない。でも、誰も信じてないのに、そんなバカバカしいことをやらなきゃいけないんですよ。

誰も信じてないバカバカしいことを強制できるというのが、権力ということなんですよ。合理的な理由のあることを強制するには、権力は要りません。強制されなくても、それをするのが正しいことなら、その知識があればやるでしょう。そうじゃなくて、そんなことをしても何の足しにもならないということをみんなが知っている、命令する方も命令される側も知っているのに、やらなきゃいけない状態。これが権力が暴走する状態で、システムが末期的症状を呈していることの兆候だと思います。放っておいても倒れると思います。

だから今の状況は、絶望であると同時に希望でもありますが、大きなシステムが倒れる時はなるべく被害が少ないように、弱い人にしわ寄せが来ないようにと考える必要があります。何もかも破壊すればいいというわけではなく、せつかく存在しているものは残した方がいいと僕は思うのです。もったいない。学校とか学部とか、いろんな施設とか、壊すの簡単だけど一から作るのは大変なんですよ。どんな制度でも壊すのは簡単。しかし作るのものはすごい時間とコストがかかるので、今あるものはなるべく潰さずに再利用した方がいいんですよ。すでにだいぶ潰されてしまったけどね。

発言者B(室井絵里) 吉岡さんテレビを見ないのでご存知無いと思いますが、クドカン(宮藤官九郎)のドラマで「不適切にも程がある」というスピンオフドラマが始まって。室井がテレビをよく見ていて、クドカンが大好きで生きていたら見てるでしょう……。で、ちょうどあれが38年前、私たちが結婚した頃ですね。38年前の昭和の時代の中学校のおっちゃん先生が、タイムマシーンで現在に。昭和に逆戻りするフェミニズムのおばちゃんが「昭和は真つ当やったんじゃん」みたいな。それが現代にどういう風に、今の我々に何かちよつとアクセントになるというか、波及するものが……。クドカンがなんか、そういう事をやろうとしてるのかなという感じです。

吉岡 すごく話題になっているから、観ている人は多いんじゃないですか。テレビがなくてもアプリで観られると教えてもらって、僕も最初の2回見たんですよ。宮藤官九郎はたいした才能だと思います。室井さんが好きだったのもよく分かる。僕が特に面白いと思ったのは、こうしたテーマは今の時代の、放送やメディアの常識に挑戦している面があつて、そういう問題って下手に扱うとクソ真面目になったりするんです。コンプラとかポリコレとかに我々が支配されている状況とか、そのことを批判する人もいるけど、ネット上での議論はともすると攻撃でギスギスしたものになりがちでしょ。互いにバカ呼ばわりしたり、対立を作り出すんですよ。

あのドラマの優れている点は、理屈つばい対立が表面化しそうになると、みんなが歌い出してミュージカルになっちゃうんですよ。芸術(音楽)による宥和というか、もちろん誤魔化してるとも言えるけど、笑いの要素もあり、楽しくなるのでいいと思うんです。意見の違いはあるだろうけど、対立しすぎるのは良くないというメッセージですね。それには共感します。自分の話もそうありたいなと思う。急に歌い出すわけにいかないんですけどね。不必要に対立を煽らないという態度

は大切だと思います。そしてああいうドラマが出てくるということ自体、時代が変わりつつある兆候の一つでもあると思う。

そしておっしゃるように最初は戦闘的なフェミニストの社会学者だった人が、昭和の良さにいちばん共感するというか、極端である方がその対極をよく理解する。もう一つは、子供ですね。思春期の男の子が女性の身体に関心を持ち始めるのだけど、現代のようなポルノグラフィじゃなくて、テレビでおっぱいが見たいって言うんですよ。それで、86年に行ったら深夜番組の「11PM」で観られるわけですよ。「子供は見たらアカンで」とか言われながらも隠れて観ていた。隠れてといっても、まだその頃はテレビは一家に一台だから、隠れて観るのは大変です。あと、スケバンも強調されてるけど、あのドラマだけを見て86年を想像する今の若者は「86年頃って女子中高生はスケバンばかりだったんですか？」って思うかもしれないね。でもそれくらい極端にした方が面白い。

ネット文化にはいい面はもちろんあるんだけど、議論の中に笑いの要素が少ないですね。笑いは人間を連帯させる重要な要素です。ネットでいろんな社会問題を批判したり他人を論駁する人はいっぱいいるけど、全部敵対関係を作り出すんですよ。敵と味方、立場が先行するみたいな雰囲気が強いです。そして何かというと論敵をバカ呼ばわりするんだよね。昔よりも言葉の攻撃は強いです。あれは何故かという、対面していないので、いくら罵倒しても殴られる心配がないからだと思う。対面だったら相手を怒らせると下手したら殴られるからね。そこで言葉でやり合う時も、相手の顔色を見ながら色々と駆け引きをする。ネットはそうした駆け引きがないので、モノローグ的です。

発言者C 私はドラマの現場で働いていて、やっぱり昔はめちゃくちゃな現場で暴力もあったみたいなのが、今は自分たちも嫌だから変わっていきこうっていう風潮はあるんです。ちゃんと口で言うとか、手を出さないとか、変わっていくべきで、私もその方が快適になるなと思ってるんです。でもそのかわりに、ちょっと良くわけわかんない人が、存在できなくなってきた……。助監督とか制作部っていう場所にいるんですが、それこそみんな無駄だって分かっている表を作ったり、予算表とか見積もりを出すことが仕事になってしまったりとか。台本なんて本当は作り込まなくても状況で作っていけてたものが、もうそれがなくなると出来ないうまいなことになってくことが窮屈に感じていて。

だから先生の言われたプロになるってことの残酷さをすごく感じていて、本当に愛好家として現場に入ってきた人達がプロとしての振る舞いを求められることによって、クリエイティビティーが、みんなで作る楽しさがどんどん削がれてる気がしています。人は本当にお金で雇われているから、こうしなきゃいけないってことをどう解放していくのかと。あと労働基準局の人と喋った時に、クリエイティブの現場では、お風呂に入ってる時にアイデアが湧いたりとかがあって、労働時間についての適正化がすごく難しいと聞いたことがある。芸能っても差別されていた人たちに担われていた歴史もあるかなと思っていて、ある種、権威化されないものを芸能として、文化の源に悔しさとか恨とか怨霊とかがあって、そこを文化として結晶化することによって権威を得たっていうサイクルがある。そこの何かねじれてるというか、つぶし合いが嫌だなんて、ふんわり思っています。

吉岡 現場でいろいろな問題点を実感している人たちっていうのは、一般的には立場が弱いんです。それを監督する管理職の人が上にいて、意思決定をする。現場の人は問題を訴えたいんだけど、一人でやると負けるんですよ。文句を言ったということで不利な立場になる危険もある

から、ガマンして黙っていようということになる。だから、弱い立場にある人同士が徒党を組むことが大事だと思いますね。部長は20人いる部下の一人が抗議に来て「何言ってるんだ」みたいな感じで追い返せるけれども、20人中15人ぐらいが一緒に来たら「何とかせんと」って思うじゃないですか。だから下の立場からは、団結することが大事なんです。と同時に、上からはどう見えるかを想像しておくことも大事で、つまり自分がもし管理する側だとしたら、自分の支配力を維持するためには、徒党を組んで来られないように下の団結を切ろうとしましょう。

団結を切るためのいろいろなシステムを導入する。いわゆるDXも、合理化、便利になるという側面と同時に、導入の仕方によっては現場の人々の団結を切る手段としても使えます。労働組合みたいな組織化をなるべくさせないようにできる。あるいは、過剰な人権思想を煽るということも分断の手段として使えます。自分が支配の側に立つと想像してみればすぐ分かります。マイノリティーを細かく分類して、それぞれが他人には分からない差別を受けている、だからすべてのマイノリティーの人権を守れと主張すれば、表面的には正しいことに聞こえるから誰も反論できない。しかし結果としては人々の連帯を阻むことができます。だから立場の弱い人々やマイノリティー同士が、「ここにも差別がある」みたいなことを摘発して争い合っている状況は、支配している側にとっては望ましいのです。弱い者同士で勝手に喧嘩してくれているのが一番都合がいい。そうすれば抗議は上に向かって来ないから。会社でも役所でも大学でも、いたるところで同じ状況があります。

発言者C 思ったのが、昔は部長クラスにいきなりや長さんみたいな「まあまあ、あいつもああ言うんだから」って言って空間を取り持ってくれる。分断をまるやかにしてくれる人がいたけれども、今みんな権力とか人事権がある人たちが分断を助長する方向に歩き出していく。今リスペクト・トレーニングとか言われているけれども、実際は、そのプロダクションに行くだけで結局火消しでしかない。吉岡先生は、どうバランスをとられてきたのかなと。

吉岡 それはね、さっき話の最後に言ったように、やっぱり見限ったんだよね。どうせ大学なんてろくなもんじゃない、面白くなるわけがないって諦めて、自分に与えられた小さな場を最大限利用して、自分の周りさえ面白ければいいっていう風に居直った。いいことだったとは思っていませんが、それがさっき言った90年だよ。ただ、まだそういう居直りが許されていたということもありますね。今の若い教員達を見ると、そういう居直りもしにくくなってるなとすごい感じる。

組織でうまくやっていくために、無意味だけでもやらなきゃいけない仕事とか規則とかあります。いわゆるブルシット・ジョブというやつです。でも、無意味だと思いながら嫌々やるって苦しい。そこから逃れられないとすると、人間はたぶん自分を守るために、自分を騙すんです。つまり「私はこれを嫌々やってるんじゃなく、自分がやりたいからやっているんだ」と思うようにする。つまり規則を内面化しちゃうんです。これは自分がやりたかったことで強制されているんじゃないって思った方が楽なんだよね。するとどうなるかというと、規則に従っていない同僚がムカつくんです(笑)。これもやっぱり分断化の一つの表れだと思いますね。

こういうことに気づくのが大事だと思う。自分と多少意見が違ってても、それだけで関係を切らないこと。今の社会は、どんなに細かな対立でも「もうあいつは、話できない」という方向へ引っ張られることが多いから。

コロナの時なんて本当にそうだったでしょう？ 僕の知り合いで、子供を連れて実家に帰ったら、ワクチンを打ってないという理由だけでもう帰ってくるなと言われ、家族や親戚づきあいを遮断された人がいる。恐ろしいことです。それまでは親が自民党で息子たちが共産党でも、それだけ

で親子の縁を切るなんてことは減多になったでしょう。政治的意見の対立ですら親子の関係が切られることはなかったのに、公衆衛生を理由にあれだけメディアで煽ると血縁関係の絆すら切ることができるのです。別に昔のような共同体をそのまま復活しようと言っているわけではないですよ。ノスタルジーじゃない。「3丁目の夕日」みたいな漫画の世界では、昭和30年代が理想化されていて、ちゃぶ台を囲んで夕食をとる家族が、お醤油が足りなくなったら隣の家に借りに行ってた、みたいな暖かい共同体が良かったように見えるけど、昭和30年代の人だって、別に隣に醤油なんか借りに行きたくなかったんだよ。でもコンビニなかったからしょうがないやん。現代は現代の連帯の形を探すべきです。

都会で長年住んでいるマンションの隣人がどんな人かも知らない、みたいなことがよく言われてきましたが、最近になってちょっと変わってきたような感じがする。マンションでも町内会くらいあった方がいいよね、っていう意識が少しずつ出てきたように思います。これは多分コロナの影響もあるし、それから戦争、外国の戦争であってもやっぱり不安感みたいなのは広がってます。日本もいつウクライナやガザのようになるかもしれないという、不安が少しずつ共有されてきたんですね。そして大きいのは自然災害です。南海トラフとか首都直下型地震とか、最近だったら現実起こった能登の地震。ある僕の知り合いが都心で30階建てのタワーマンションに住んでいて、そこにもしマグニチュード9とか来たら、どうなるのかと。地震が来るのは仕方がないとしても、10年住んでいるのに、隣人が何をやってる人かも知らない、エレベーターで会っても挨拶もしない。それから、これ聞いて本当にびっくりしたんだけど、子供がエレベーターで大人と一緒に上がった時、自分の階のボタンを押すのを手で隠せて言われるらしいんですね。何階に住んでいるかということを知らせない。そこまで共同性の希薄な場所に大災害が来たら、どうやって助け合えるのかと。そういう不安があるので、マンションでもやっぱり町内会くらいあった方がいいという意識は復活してきていると思います。最低限の共同体がなければ、災害が来たときに地獄ですからね。

発言者C ルールを内面化してしまうと言うのは、仲間同士のつぶし合いでよくある事で、強くいる人が一番自分を縛ってるってすごく感じるんです。苦しい人がやっぱり傷つけてるんだなと。そこをどういう風に歩み寄っていくのかなって。

吉岡 難しいけど、やはりバランス感覚だよな。原理原則じゃなく何でも程度問題として判断する方がいい。物分りのいい上司がいればいいというわけでもない。いかりや長介みたいな部長は、鬱陶しいことは鬱陶しい。誘われたら飲みに行かなきゃいけないしね。

今回は最後になります。テーマは室井さんが発案した「不死と月見草?」。今はまだ、何喋っていいか正直わからない(笑)。不死についてはまだ喋れるけど、月見草が難しい。なので、ちょっと考えてみます。

安藤 はい、では次回よろしくお願ひします。ありがとうございました(拍手)。

2024年2月10日(土) 於:京都芸術センター「大広間」